2015年7月1日　アクセス　（1976年11月10日第三種郵便物認可）　第462号

地方小出版 情報誌 アクセス

毎月1回　1日発行
購読料　定価150円（本体139円）
年間1,500円（税込み）
振替　00120-0-19017

発行所　㈱地方・小出版流通センター　〒162-0836　東京都新宿区南町20
編集　アクセス編集委員会　TEL.03-3260-0355　FAX.03-3235-6182

「本の雑誌」創刊40周年記念

無理をせず、頭を下げず、威張らず、やっていく。

文／本の雑誌社営業・杉江由次

「本の雑誌」創刊四〇周年記念号（二〇一五年六月号）が社内に納品され、社員一同沸き立っているとき一本の電話が鳴った。受話器を取ったのは事務の浜田で、「ハイ、ハイ、かしこまりました」とまるで電話注文を受けるような受け答えをしていたから、ほかの社員は電話のことなど気にせず、表紙や目次を見ながら出来映えについて話し合っていた。それは「本の雑誌」が出来上がって来たときに必ずしている習慣だった。

するといつの間にか電話を終えた浜田が「すみません」と言って、立ち上がる。周りを見渡しか細い声で報告した。

「MK流通センターが今日、倒産したそうです」

MK流通センターが……倒産した……？

その言葉の意味を捉えるのにしばらく時間が必要だった。一呼吸置いて「えええええ！」という悲鳴が社内に響く。報告した浜田は口をぽかんとあけたままだ。

MK流通センターとは、本の雑誌社のすべての在庫の保管と出荷流通を委託している倉庫会社である。

創刊四〇周年記念号が出来たその日、本の雑誌社は四〇年間で最大の危機を迎えた。

一九七六年に元会社の上司部下の関係で、後に作家となる椎名誠と、後に書評家となる目黒考二が、それまでの書評に飽きたらずもっと率直に本のことを語ろうと「本の雑誌」を創刊した。その頃のことは当然入社十八年目の私は知らないので、ある意味社史でもある椎名誠著『本の雑誌血風録』（新潮文庫）と目黒考二著『本の雑誌風雲録』（本の雑誌社）を読んで頂きたいのだが、「本の雑誌」は季刊、隔月刊、月刊と変遷しながらこの五月に通巻三八四号、四〇周年を迎えた。

『完全復刻版「本の雑誌」創刊号～１０号BOXセット』本体価格5000円

働いている私が驚くのだから世間の人たちはもっと驚いていると思う。こんな会社が、こんな雑誌が、四〇年も続くのかと信じられない気持ちでいっぱいだ。なにせ社是が「無理をしない、頭を下げない、威張らない」という会社で、それを誰一人として毎朝唱和する必要もなく、実践しているのだ。

今でも忘れられないのは入社当時、引き継ぎ後に退職していくことになっていた前任者から俯き加減に頂いたアドバイスだ。

「ここを会社だと思うといろいろ苦しくなるから、部活かサークルくらいに考えたほうがいいよ」

確かに本の雑誌社は、前任者が言うように「会社」ではなかった。前年比もなければ売上目標もなく、会議すらなかった。その代わり布団と洗濯機と競馬があった。みんな寝泊まりして遊んでいるようだった。雑誌づくりもアマチュアなら会社経営もまったくのアマチュアだった。きちんとした「会社」から転職してきた私は、前任者が心配したように憧れと生活の狭間で苦しんだ。苦しんでいるうちにすっかり馴染んでしまった。不覚。

そんな「会社」ではない本の雑誌社が出版不況のなかで業績悪化するのは当然のことであった。なぜなら無策だからだ。ついに二〇〇八年十二月に休刊の危機を迎えることになったのだが、その日のことはいつかどこかでしっかり書き記すつもりなのでここでは詳しく書かない。ただ多くの協力と少なからぬ血とたくさんの涙によって、どうにか乗り越えることができたと報告しておく。

「本の雑誌」は、十年前には当然ながら三〇周年を迎えたわけだが、三〇周年と四〇周年では大きな違いがある。それは世代交代が行われたということだ。編集長椎名誠と発行人目黒考二という体制から編集発行人浜本茂となり、今ではその下の私を含めた五人の社員ですべて取り仕切っている。これは他の業種でもそうであるかもしれないが、小さな会社の世代交代は難しい。しかも雑誌という作り手の顔が現われやすい商品ならなおさらだ。上手く交代できたのかどうかは読者が判断することだけれど、会社というのは創業するのも継続するのも大変だけれど

も、受け継ぐことが一番難しのではないかと最近考えている。

そして四〇周年を記念して創刊号から十号をそのまま復刊した『完全復刻版「本の雑誌」創刊号～１０号BOXセット』を出版した。果たしてこんなものが売れるのだろうかと半信半疑だったのだが、驚くことに発売一週間で品切れ、超少部数ながらまさかの重版となった。出してみるもんだ。ただしその製作段階で四〇年前の「本の雑誌」を改めて読むことになり、そのあまりの面白さに打ちのめされてしまった。「本の雑誌」四〇年の歴史は、結局この四〇年前に出た「本の雑誌」との戦いだった。

「昔は面白かった」

おそらく私が入社してからの十八年で、最も多く聞いた感想はこの言葉だ。読者は初恋の人を愛するように読み始めた頃の雑誌を愛するのだろう。過去との戦いは今も続いており、しかもそれは幻想ではなく、実際に面白かったのだから迷惑この上ない。

さて、四〇年間の最大の危機の話に戻そう。倉庫が倒産し、まず初めに心配したのは在庫である。これが差し押さえになってしまったら、本の雑誌社も倒産してしまう。弁護士に相談すると在庫は本の雑誌社の資産だから問題ないと言われたので、ほっと一息つく。いや一息ついてる間はなく、次は新たな倉庫会社と一日でも早く契約しなければならない。契約が一日伸びれば出荷が一日滞るのだ。返品はいくら滞っても構わないけれど、納品が滞っては倒産してしまう。時間との戦いだったが、どうにか信頼できる倉庫会社を紹介いただき、翌日には契約することができた。

原稿を書いているちょうど本日、「本の雑誌」四〇周年と一ヶ月号（二〇一五年七月号）が出来上がってきた。それは最大の危機の始まりから一ヶ月が過ぎたことを示す。その間に倒産した倉庫にあった在庫のうち、A品（新品）の移動は済んだが、B品（返品）の整理はまだ終わっていない。ひとまず出荷は出来ているものの、この在庫移転のコスト、ウン十万円が重くのしかかる。当然ながら倒産した倉庫は払ってくれないから、自分たちで稼がなければならない。

しかしもっと大きな危機は底の見えない出版不況である。四〇周年を迎えることはできたが、五〇周年を迎える自信はまったくない。想像できるのは四十二周年くらいまでのことだ。それでも本の雑誌社は、無理をせず、頭を下げず、威張らず、やっていく。なぜならそれを失ってしまったら「本の雑誌」でなくなってしまうからだ。

（すぎえ　よしつぐ／本の雑誌社営業）

新刊ダイジェスト

※価格は税込（消費税率8%）表示です。

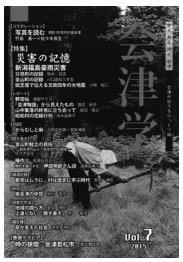
『熊野の廃校』●中島敦司／湯崎真梨子著

和歌山県南部、熊野地方は全国的に見ても山が深く、山間には多くの小さな集落が点在する。これら小集落において、学校は文化の中心であり、暮らしの中に必要不可欠な公的施設だった。しかし昭和40年代、高度経済成長の中、人々が山から里へ下りて行くとともに、学校は閉ざされていき、多くの廃校校舎が残されるに至った。そして平成20年代、少子高齢化の進行とともに、廃校は中規模集落や市街地近辺でも当たり前のように出現している。

この本の主役は、平成の廃校ではなく、昭和高度経済成長期の山間小集落の廃校である。著者はともに大学の教授であるが、「廃校探しはトレジャーハンティング」というキャッチコピーなどから、研究的探究心に加えて、趣味的探究心を持ちながら廃校を探索していることがうかがえる。表紙を飾る畝畑（うねはた）をはじめ、樫山、大桑、大瀬、兵生（ひょうぜい）など、集落自体が廃村になるような辺境の廃校ほど、お宝の輝きが際立つように感じられる。

◆ 4320円・A５判・253頁・**南方新社**・鹿児島・2015/4刊・ISBN978-4-86124-317-2

『会津学　ｖｏｌ．７　ー特集・災害の記憶』●奥会津書房編



雑誌「会津学」は、2005年の創刊以来、聞き書きという手法をもって福島県会津地域の文化の掘り起こしと発信を続けてきたが、３年ぶりに発刊された本号をもって終刊となった。誠に残念なことだ。その最終号の特集は「災害の記録」。東日本大震災のあった2011年の７月、新潟県とまたがる阿賀川、只見川沿いに甚大な洪水被害をもたらした豪雨災害を取り上げる。只見、金山両町の被災住民、災害現場で活動した消防団員、民生委員らから、災害の状況、被害、当日の行動、避難所及び避難解除後の生活、困ったこと・大変だったこと、復旧作業、ボランティアの様子、今後の課題などが語られる。金山町の記録は、県立川口高等学校の３年生たちが授業として聞き書きしたものだ。こうした生の記録こそが後世に伝えられるべきであると思う。末尾に、会津学研究会代表の菅家博昭氏が、自らの経験を踏まえ、聞き書きの作法と調査のための備忘録を寄せており、大いに裨益される。

◆ 1543円・A５判・256頁・**奥会津書房**・福島・2015/3刊・ISBN978-4-901167-22-2

『神在月－神々集う出雲の國』●錦田剛志監修

陰暦の10月、日本列島の神々が会議をするため一斉に出雲国にやってくる。各地の神がいなくなるということで、10月は「神無月」と異称される。逆に神々を迎える出雲国では「神在月」となる。さながら神々のサミットといった観があるが、12世紀半ば以降、中世の歌学の世界で広まった説らしく、もともと十月を「かむなづき」と言っていたのが、いつしか「神無月」と漢字を当てたため混乱がおこった。「かむなづき」は「神の月」で神々を祭る月という意味であろう。現在の出雲地方では、この月に出雲大社・佐太神社など10社で神在祭が行われる。別名「御忌祭」とも称するごとく、土地の人びとは期間中慎んだ日常生活を送らなければならないという。佐太神社ではウミヘビを龍蛇神と見立てて神前に奉納する。八百万の神を迎える使いだ。本書は、各神社で行われる儀式や風景を長年出雲を撮り続けてきた写真家による作品で綴る。神々が集う神秘で厳粛な世界が立ち現れる。

◆1944円・A4判・111頁・**山陰中央新報社**・島根・2015/4刊・ISBN978-4-87903-185-3

『京都の市電　昭和を歩く　－街と人と電車と』●福田静二著

かつて日本の多くの都市に路面電車が走っていました。京都市でも碁盤の目状の街路を縫うように京都市電が走っていました。最後の路線が廃止されたのは約40年前の1978年です。本書は晩年の市電を記録し続けた著者の写真を中心に、京都に路面電車のあった頃の風景をまとめています。まだまだ古い建物も多かった当時の京都の街並みに、道路をトコトコ走る市電はよく似合います。そんな懐かしさもさることながら、驚かされるのは利用者の多さです。残された写真の多くは停留場で市電を待つ沢山の利用者を写しています。大学が多い学生の街であり、また観光都市でもある京都。そうした中で市電が重要な交通機関として使われていたことがわかります。地下鉄に取って代わられる形で姿を消した市電ではありますが、本書の写真からは人と市電が寄り添って織り成す風景の魅力が伝わってきます。路面電車が見直されつつある昨今を待たずして全廃となったのが惜しまれます。

◆2808円・B5判・191頁・**トンボ出版**・大阪・2015/4刊・ISBN978-4-88716-132-0

『老いと幼なの言うことには』●小沢牧子／エリザベス・コール著

1937年生まれで息子2人と孫4人を持つ"引退母"と、その1人の息子の連れ合いで1976年にアメリカで生れ1歳半の子を持つ"現役母"が、異なった文化体験から、生まれ、育て、老い、やがて来る死までを語り合う「対談・めぐるいのち」。写真家として、開発の進んでいない世界は美に息をさせると、メキシコ、ベネズエラ、沖縄、バングラディッシュ、ネパールなど第三世界を経巡り、子どもと老人を被写体にした"現役母"のフォトエッセイ「幼なの世界、老いの風景」。せっかく歳をとったのだから、やりたいことはできること、オレオレ詐欺の電話もウイットでからかい、生れてからいちばん古くていちばん新しい毎日を綴った"引退母"の「老いの場所から」の3部からなる。「育ちゆく幼い者への希望と、去りゆく老いた者の安心を探しながら、それぞれの場でできることをつなげていきたい」と結ばれる。困難な社会の未来に、じんわりと希望が涌いてくる、不思議な本である。

◆1620・円・B5変形判・93頁・**小澤昔ばなし研究所**・神奈川・2015/4刊・ISBN978-4-902875-68-3

地方小出版 流通センター

ジャンル別 新刊案内

2015年5月1日～31日
流通センター着

※各ジャンル内での出版社名は所在地の北から南の順に並んでいます。

価格は税込（消費税率8%）表示です。

【雑誌】

◆**ゆきのまち通信**　158　企画集団ぷりずむ編　A5　50頁　500円　企画集団ぷりずむ［青森］　978-4-503-20532-2　15/05

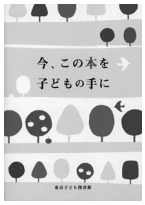
◆**会津人群像**　No.29　阿部　隆一編　B5　146頁　1296円　歴史春秋社［福島］　978-4-89757-854-5　15/05

売行良好書

期間：2015年5月16日～6月15日

［出荷センター扱い］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『今、この本を子どもの手に』1080円・東京子ども図書館　(2)『明星』3240・円・ナナロク社　(3)『本土の人間は知らないが、沖縄の人はみんな知っていること』1404円・書籍情報社　(4)『不登校は１日３分の働きかけで９９％解決する』864円・リーブル出版　(5)『日本の鉱山を巡る（上）』2160円・弦書房　(6)『未来ちゃん』2160円・ナナロク社　(7)『京都の市電　昭和を歩く』2808円・トンボ出版　(8)『神在月』1944円・山陰中央新報社　(9)『岐路に立つラジオ』1728円・ラグーナ出版　(10)『汽車ポッポ判事の鉄道と戦争』1944円・弦書房　(11)『九州の巨人！と巨木！！巨大仏！！！』1728円・書肆侃侃房　(12)『松江城』540円・ハーベスト出版



［三省堂書店神保町本店　センター扱い図書］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『東京かわら版　６月号』648円・東京かわら版　(2)『「本の雑誌」創刊号～１０号ＢＯＸセット』5400円・本の雑誌社　(3)『本の雑誌　３８５号』720円・本の雑誌社　(4)『パズル通信ニコリ　Ｖｏｌ．１５１』907円・ニコリ　(5)『本で床は抜けるのか』1728円・本の雑誌社　(6)『古本屋ツアー・イン・神保町』2160円・本の雑誌社　(7)『ミステリ編集道』2160円・本の雑誌社　(8)『僕らは寄席で「お言葉」を見つけた』1080円・東京かわら版　(9)『松江城』540円・ハーベスト出版　(10)『小満んのご馳走』1080円・東京かわら版

［ジュンク堂書店池袋店　地方出版社の本―センター扱い図書］ ※価格は税込（消費税率8%）表示です。

(1)『那覇の市場で古本屋』1728円・ボーダーインク　(2)『ペコロスの母に会いに行く』1296円・西日本新聞社　(3)『京都の市電　昭和を歩く』2808円・トンボ出版　(4)『老いと幼なの言うことには』1620円・小澤昔ばなし研究所　(5)『不登校は１日３分の働きかけで９９％解決する』864円・リーブル出版　(6)『奥多摩登山詳細図（西編）　雲取山・三頭山・御前山・鷹ノ巣山　全１１２コース』950円・吉備人出版　(7)『奥多摩東部登山詳細図　全８８コース』823円・吉備人出版　(8)『復刻　桜島噴火記』1944円・南方新社　(9)『知られざる日本の地域力』1944円・今井出版　(10)『サイレンと犀』1836円・書肆侃侃房　(11)『学校の手話』2700円・星湖舎　(12)『ひずみの構造』1008円・琉球新報社

以下ホームページ等でも各種情報提供を行なっております。ご利用ください。
ＵＲＬ：http://neil.chips.jp/chihosho/　　ツイッター公式アカウント：@local_small

トピックス ―― ★★★

▼1976年の当社設立時、まだ取次会社との取引きが始まっていない時点で、西武百貨店池袋店の催事場でのブックフェア（1976年５月、売上436万円）が企画されて大きな反響を呼び、これが当センターが社会的に認知される大きな力となりました。以降数多くの催事を行い、共に新しい本の売場、流通を創ってきました。その西武ブックセンター池袋店、現在のリブロ池袋店が７月20日で、閉店になることが決まりました。企業ＰＲ誌などの流通に載らない刊行物の発掘や、「本の雑誌」「広告批評」「ｉｓ」などの新しいジャンルの雑誌や一人出版社のフェアなどユニークな切り口で、70年代から80年代の芸術・思想等新しい大衆文化の潮流を体現する棚を読者に提供してきた店です。当社にとっては1982年２月に催事場で６日間行い、3200万円というとんでもない売上げをあげた「全国ふるさとの本まつり」が記憶に残ります。また同ブックセンターとの直接取引きの窓口として、様々なユニークな新規版元の出版物を流通させてきました。時代が変わったといえ、感謝とともに残念な限りです。現在最後の当社扱い出版物のフェアーをやっています。

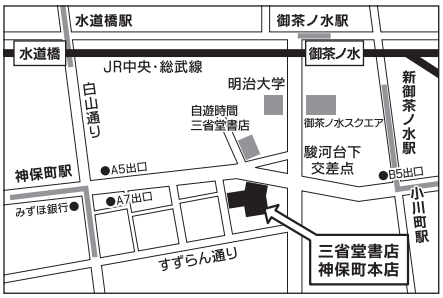
郵便販売のご注文方法

◎お名前、お届け先（郵便番号、住所）、連絡先お電話番号、ご注文品の書誌名、冊数の必要事項を明記のうえ、下記までＦＡＸでご連絡ください。
◎送料は、冊子小包・メール便共実費でお送りさせて頂きます。基本的にメール便は、一冊２１０円でお送り致します。（メール便の到着は、発送してから３～４日かかります。）お急ぎの方、その他ご要望がございます場合はお気軽に下記までお問い合せ下さいませ。
◎なお書籍お買上総計（税抜き価格）が5,000円以上の場合は、送料をサービスさせて頂きます。

★地方・小出版流通センター
ＦＡＸ：０３－３２３５－６１８２

地方・小出版物のデータになります。綴じて保存してください。

BOOKS SANSEIDO
三省堂書店
営業のごあんない

神保町本店 ４階
地方出版・小出版物フロア
営業時間　10：00 AM～8：00 PM
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1
TEL. 03-3233-3312(代)
URL. http://www.books-sanseido.co.jp

本店4階売場では、地方・小出版流通センター扱いの新刊全点のほか、地域別に書籍を取り揃えております。また、地域ならではのタウン誌、趣味の雑誌も扱っております。